

積層する都市 / JR上野駅エリア

年表

1932 JR上野駅
 関東大震災によって消失した旧代駒倉にわたり、現在のJR上野駅を基礎となる駅舎が建設された。この駅舎に正面玄関の機能を持つ30×20.3×13.25mの広間空間が設置され、以降、上野駅は現在に至るまで、上野駅地区を象徴するものとして役割を担う。

1956 国立西洋美術館
 はじめてル・コルビュジエから送られてきた配置図には、依頼された美術館（現在の国立西洋美術館）に加え、臨時展示場としての機能を備える総合芸術展示館、「不思議の島」と呼ばれる劇場を含めた三つの施設が配置された。ル・コルビュジエは三つの建物で囲まれたフォーラムのある複合施設によって、日本政府が求める「文化センター」だった。

1958 東京文化会館
 国立西洋美術館に隣接する東京文化会館が建設されたことにより、ル・コルビュジエが提案していた建物の配置的な調和に加え、建物高さ、ボリュームの調和により構成されるフォーラムの概念が段階的に加わったと言える。東京文化会館の建設により、JR上野駅エリアに前景後景という景観的要素が追加された。

バッファゾーン
 世界遺産条約は保全対象のコア・コア周囲にバッファゾーンの設定を義務づけている。特に都市部での経済発展的意欲との間に矛盾が生じやすく、20世紀建築と周辺環境に関する解決策の検討が求められている。

2011 『マドリッドドキュメント2011』
 世界遺産への登録を審議するUNESCOの諮問機関であるICOMOS20世紀遺産のための国際学術委員会(ISC20C)は、2011年から2012年にかけて、『20世紀建築遺産のための介入的準法-CAH 20thC』の国際条約において、『マドリッドドキュメント2011:20世紀建築遺産の保存のための取組み準法』が採択された。『マドリッドドキュメント2011』で述べられている文化的価値の識別と評価の概念としては、「1.3 敷地の景観・背景・周囲のランドスケープなどを識別し、評価する。」において、「敷地の景観や背景(周囲のランドスケープ)「時代や所在地に関連する別の計画体系やコンセプト」の識別をあげている。

ル・コルビュジエの景観認識
 ル・コルビュジエは都市計画において、周辺景観を建築の背景とし、建築形態と調和させる視覚的効果を重視したとされ、近景と遠景のデザインを遠近感も含めて富麗的に構想している。また建築と調和する周囲の景観を「建築的景観」として認識し、建築とは異なる景観を比喩により秩序立てるものとして、複数の建築の景観による調和を自覚し、輪廓を用いた複層的効果、景観を背景とした形態的対比や平面幾何学的比例による配置計画を提案している。

ル・コルビュジエと透視図の関係
 ル・コルビュジエにより描かれた透視図の内、消失点が遠景の透視図とは異なる。例として「エビテル神話」の透視図や「ヴァイラ・ハリヤス」のポエキエルの透視図」などを、いずれも建物の奥行きが誇張されて表現されている。同時に背景に見え始める周囲の景観は遠ざかって見えている。

『台東区景観計画』
 台東区は観光事業の基盤となり得る文化資源に対する景観計画を制定している。JR上野駅周辺の景観形成方針は、「上野駅周辺や上野恩賜公園内からの見え方に配慮した景観形成として、「上野駅や上野の森への眺めや上野恩賜公園内(西野池や西野池前線等)から見た眺めを阻害しないようなデザインとする」などバッファゾーンの修景計画につながるガイドラインを提示している。

『上野公園グランドデザイン』
 上野公園グランドデザインは上野公園の将来像を明確にするとともに、将来像を実現するための方向性と基本施策等を示すことを目的として制定された。上野公園の景観に対する理念が掲げられている一方で、現在は計画段階にあり、まだ具体的な建築には至っていない。

再開発事業による高層ビルの建設
 JR上野駅エリアは文化施設が集積する上野公園に近接していると同時に、都心の開発部に位置している。そのため近年、再開発事業などにより高層ビルが建設され、上野公園周辺の景観への影響が懸念されており、景観計画の理念に基づき建築設計が求められている。

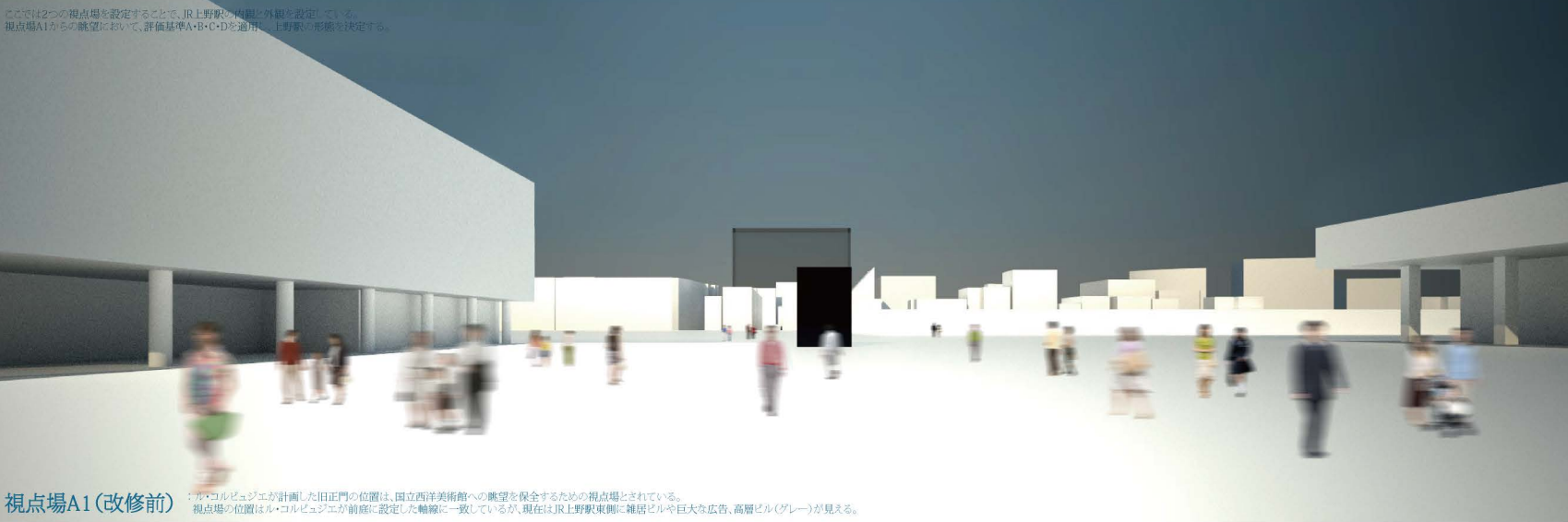
2020 東京オリンピックの開催
 現在、2020年の東京オリンピック開催に向けた上野地区の地区構想もあり、経済発展的意欲とともにJR上野駅エリアの上野公園の景観に対する配慮が求められている。

分類	事例名称	写真	アウトライン化	透視図化	前景(透視図)	背景(透視図)	スカイライン
a	〈カバリ屋敷〉 キヤブ屋						
	〈建築師館〉 ワンター デルレンデン						
	〈マルロー館〉 デザイン						
b	〈国家歴史保全法〉 シンシヤンシティ						
	〈ジュレスワイヒ・ホルスタイン州法〉 リュウベック						
	〈ザルツブルグ州法〉 ザルツブルグ						
c	〈ウォーニャー線軌道〉 コンシエジジョー						
	〈ウォーニャー線軌道〉 シャイロウ宮						
	〈ウォーニャー線軌道〉 ゲルサイエ宮						
	〈ウォーニャー線軌道〉 シャンゼリ広場						
	〈高さ規制〉 ワシントン モニュメント						
	〈歴史的景観〉 セントポール大聖堂						
〈アーバンデザイン〉 カヌタム ハルスタター							

景観構造の透視図的解釈に着目したJR上野駅エリア改修計画



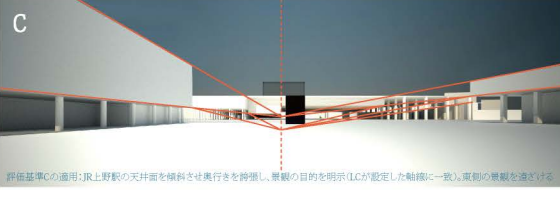
視点場A1 (改修後) : 上野公園内の流動空間における動的な視点の中に、視点場A1における静的な視点が設定される。動的な視点と静的な視点という、異なる視覚的特性のコントロールによって領域を形成している。



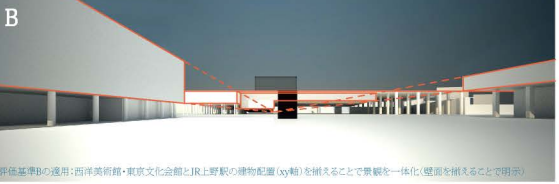
視点場A1 (改修前) : ル・コルビュジエが計画した旧正門の位置は、国立西洋美術館への眺望を保全するための視点場とされている。視点場の位置はル・コルビュジエが前庭に設定した軸線に一致しているが、現在はJR上野駅東側に雑居ビルや巨大な広告、高層ビル(グレー)が見える。



A 評価基準Bの適用: 消火点をもつ外観とすることで景観をモニュメント化(視線を揃え、軒裏を連続させることで明示)



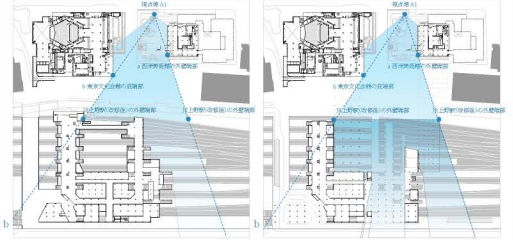
C 評価基準Cの適用: JR上野駅の天井面を傾斜させ歩行を誘導し、景観の目的を明示(LCが設定した軸線に一致)、東側の景観を遠くさせる



B 評価基準Bの適用: 西洋美術館・東京文化会館とJR上野駅の建物配置(xy軸)を揃えることで景観を一体化(壁面を揃えることで明示)



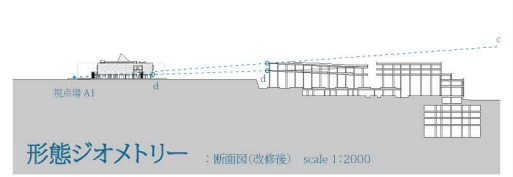
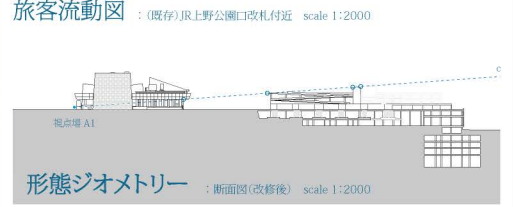
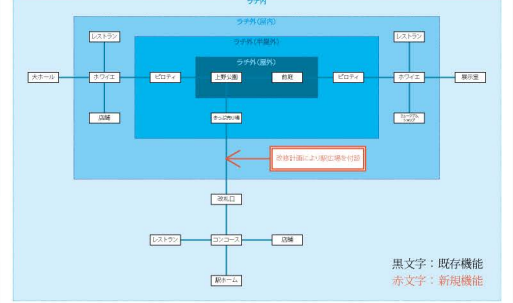
D 評価基準Dの適用: 柱のスパン及び断面寸法を用いし、ファサードを整理する



視点場A1の可視領域 : JR上野駅公園改札レベル scale 1:4000



改修箇所 : JR上野駅公園改札レベル scale 1:4000

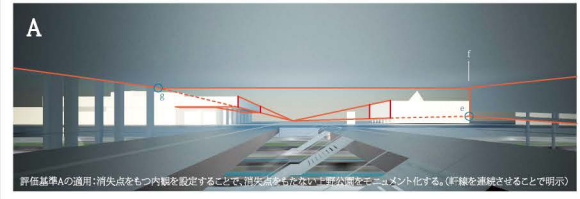




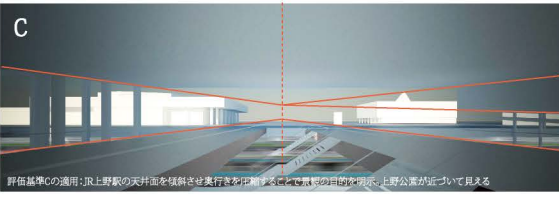
視点場 C (改修後) : 改修後では駅舎と同時に建物の見え方を設定するため、滞留空間となる視点場Cを設定している。駅と公園を視覚的に連続させて形成することで、目的の異なる行為が一つの空間で生まれている。



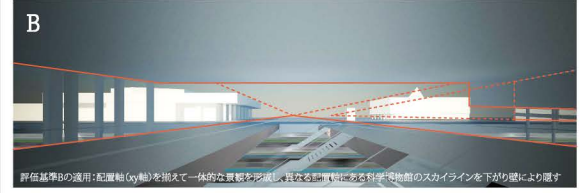
自動車経路図 : JR上野駅公園口改札レベル scale 1:4000



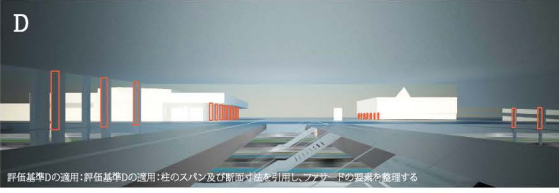
評価基準Aの適用: 消失点をもつ内観を設定することで、滞留空間をより公園側をエメント化する。(軒線を連続させることで明示)



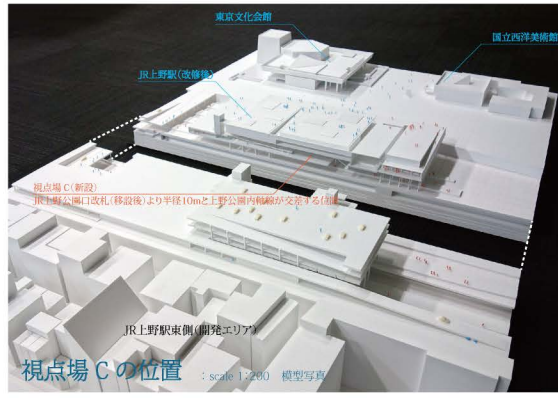
評価基準Cの適用: JR上野駅の天井面を傾斜させ通行性を高めることで建物の目的を明示、上野公園が二ついて見える



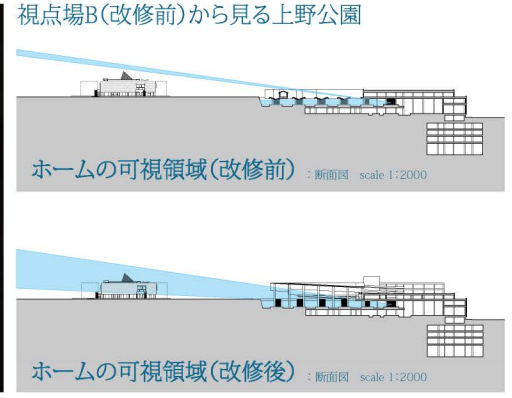
評価基準Bの適用: 配属軸(Oy軸)を揃えて一体的な景観を形成し、異なる階層にある科学博物館のスカイラインを下がり壁により隠す



評価基準Dの適用: 評価基準Dの適用: 柱のスパン及び配属軸を引用し、フック下の空間を整理する



視点場Cの位置 : scale 1:200 模型写真



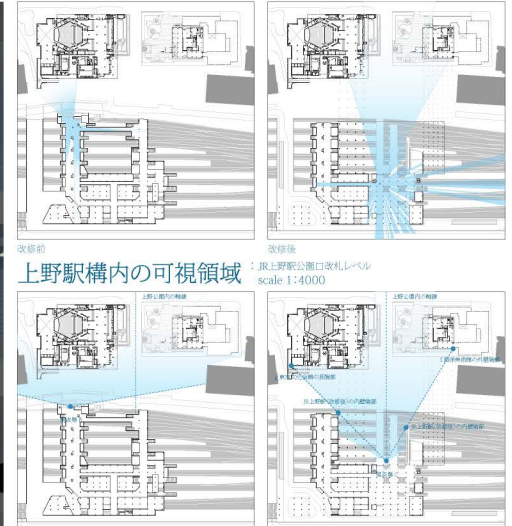
視点場B(改修前)から見る上野公園

ホームの可視領域(改修前) : 断面図 scale 1:2000

ホームの可視領域(改修後) : 断面図 scale 1:2000



列車ホーム(改修後)から見る上野公園のスカイライン : 改修後は駅列車ホームも国立西洋美術館・東京文化会館のスカイラインを眺めることが出来る滞留空間として捉えている。旅客が電車を持つ時間も上野公園のスカイラインの眺望が可能となることで、駅全体を上野公園と一体的な空間としている。



上野駅構内の可視領域 : JR上野駅公園口改札レベル scale 1:4000

改札口付近の可視領域 : JR上野駅公園口改札レベル scale 1:4000